

ういろうり  
外郎売り

だいいちだん  
第一段

せっしゃおやかた もう おたちあい うち  
拙者親方と申すは、御立会の中に、

ごぞん かた  
御存じのお方もござりましょうが、

えど た にじゅうりかみがた  
お江戸を立って二十里上方、

そうしゅうおだわらいつきまち す  
相州小田原一色町をお過ぎなされて、

あおもものちょう のぼ いで  
青物町を登りへお出なさるれば、

らんかんばしとらやとうえもん  
欄干橋虎屋藤右衛門、

ただいま ていはついた えんさい なの  
只今は剃髪致して、円齋と名乗りまする。

がんちょう おおつごもり て い こくすり  
元朝より大晦日までお手に入れます此の薬は、

むかしちん くに とうじん ういろう ひと ちょう き  
昔陳の国の唐人、外郎という人、わが朝へ来たり、

みかど さんだい お  
帝へ参内の折から、

こくすり ふ こ お  
此の薬を深く籠め置き、

もち とき いちりゅう  
用ゆる時は一粒ずつ、

かんむり すま と だ  
冠の透き間より取り出す。

よ <sup>な</sup> みかど <sup>とうちんこう</sup> たま  
依ってその名を 帝 より、透 頂 香と給わる。

すなわ <sup>もんじ</sup> <sup>いただ</sup> す <sup>におい</sup> か <sup>もう</sup>  
即 ち文字には 頂 き、透く、 香 と書いて、『とうちんこう』と申す。

ただいま <sup>こ</sup> <sup>くすりこと</sup> <sup>ほか</sup> <sup>せじょう</sup> <sup>ひろ</sup>  
只 今 は此の 薬 殊 の外、世 上 に弘まり、

<sup>にせかんばん</sup> <sup>だ</sup>  
ほうぼうに 偽 看 板 を出だし、

<sup>おだわら</sup> <sup>はいだわら</sup> <sup>だわら</sup> <sup>すみだわら</sup> <sup>もう</sup>  
イヤ、小田原の 灰 俵 のさん 俵 の 炭 俵 のと、いろいろに申せども、

<sup>ひらがな</sup> <sup>おやかたえんさい</sup>  
平仮名をもって「ういろう」といたしたは、親 方 円 斎 ばかり。

<sup>たちあい</sup> <sup>うち</sup> <sup>あたみ</sup> <sup>とうのさわ</sup> <sup>とうじ</sup> <sup>で</sup>  
もしやお立 会 の内 に、熱海<sup>か</sup>塔 ノ 沢 へ、湯 治 にお出なさるるか、

<sup>いせごさんぐう</sup> <sup>おり</sup> <sup>かなら</sup> <sup>かどち</sup>  
または伊勢御参宮の折からは、必 ず門 違 いなされますな。

<sup>のぼり</sup> <sup>みぎ</sup> <sup>かた</sup> <sup>くだ</sup> <sup>ひだりがわ</sup>  
お 上 ならば右の方、お下りなれば左 側 、

はっぼう <sup>やつむね</sup> <sup>おもて</sup> <sup>みつむねぎょう</sup> <sup>どうづく</sup>  
八 方 が八 棟、表 が三 ッ 棟 玉 堂 造り。

はふ <sup>きく</sup> <sup>きり</sup> <sup>とう</sup> <sup>ごもん</sup> <sup>ごしゃめん</sup>  
破風には菊に桐の臺の御紋を御赦免あつて

けいずただ <sup>くすり</sup>  
系 図 正 しき 薬 でござる。

## 第二段

いやさいぜん かめい じまん もう ごぞんじ かた  
イヤ最前より家名の自慢ばかり申しても、御存知ない方には、

しょうじん こしょう まるの しらかわよふね  
正身の胡椒の丸呑み白河夜船。

いちりゅう て きみあい め  
さらば一粒たべかけて、その気味合をお目にかけてましよう。

ま こくすり ひとつぶした うえの  
先ず此の薬をかように一粒舌の上に載せまして、

ふくない おさ いや い  
腹内へ納めますると、イヤどうも云えぬは、

い しん はい きも すこ  
胃・心・肺・肝が健やかになって

くんぷうのんど きた こうちゅうびりょう しょう ごと  
薫風咽候より来り、口中微涼を生ずるが如し。

ぎょ ちょう き こ めんるい くいあわ ほかまんびょうそっこう かみ ごと  
魚、鳥、木の子・麺類の喰合せ、その外万病速効あること神の如し。

こ くすりだいいち きみょう した まわ こと ぜに はだし に  
さて此の薬第一の奇妙には、舌の廻る事が銭ごまが跣足で逃げる。

した まわ だ や たて  
ひよっと舌が廻り出すと、矢も楯もたまらぬじゃ。

## 第三段

そりやそりやそりや、そりやそりや まわ き まわ く  
廻って来たは、廻って来るは、

のど ぜつ げ しおん  
あわや咽喉、さたらな舌に、か牙さ歯音。

ふた しん けいちょうかいごうさわ  
はまの二つは唇の軽重開合爽やかに、

あかさたなはまやらわ、をこそとのほもよろお。

ひと に ぼん ぼんごめ  
一つへぎへぎ二へぎほしはじかみ 盆 盆 米 ぼんごぼう。

つ だて まめ ざんしょ しょしゃざん しゃそうじょう  
摘み 蓼 つみ 豆 つみ 山 椒、書 写 山 の 社 僧 正。

こごめ なまが こごめ なまが こごめ なまが  
粉米の生 嚙み 粉米の生 嚙み こん 小米の生 嚙み、

しゆすひじゆす しゆすしゆちん  
縹子 緋縹子、ひじゆす 縹子 縹珍、

おや かへいこ かへい おや こ こかへいおやかへい  
親も 嘉兵衛子も 嘉兵衛、親 かへい子かへい、子 嘉兵衛の親 嘉兵衛。

ふるぐり き きくち  
古 栗 の 木 の ふる 切り口。

あまがっぱ ばんがっぱ  
雨合 羽か 番合 羽か、

きさま きゃはん かわぎゃはん われら ぎゃはん かわぎゃはん  
貴様の脚 絆も 皮 脚 絆、我等が脚 絆も 皮 脚 絆。

かわばかま ぽころ みはりはりなが にぬ ぬ だ  
しっ 革 袴 の しっ ぽころびを、三 針 針 長 に ちよと縫うて、縫うて ちよとぶん 出せ、

かわらなでしこ のぜきちく  
河原 撫子、野 石 竹。

によらい によらい み によらいむ によらい  
のら 如 来 のら 如 来、三 のら 如 来 六 のら 如 来。

いっすんさき こぼとけ けつまず  
一 寸 先 の お 小 仏 の お 蹴 躓 きやるな。

ほそどぶ りきょう だらなら まながつお しごかんめ  
細 溝 に どの じよ によろり、京 の なま 鱈 奈良 なま 学 鱈、ちよと 四五 貫目。

ちやた ちやた た ちやた あおたけちやせん ちや た  
お茶 立ちよ 茶 立ちよ、ちやつと 立ちよ 茶 立ちよ、青 竹 茶 筥 で お茶 ちやと 立ちよ

## 第四段

く く なに く こうや やま こぞう  
来るは来るは 何 が来る、高野の山のおこけら小僧、

たぬきひやつびき はしひやくぜん てんもくひやつぱい ぼうはつびやつぽん  
狸 百 匹、箸 百 膳、天目 百 杯、棒 八 百 本。

ぶぐ ばぐ ぶぐ ばぐ みぶぐばぐ あ ぶぐ ばぐ むぶぐばぐ  
武具・馬具・武具・馬具・三武具馬具、合わせて武具・馬具・六武具馬具、

きく くり みきくり あ きく くり むきくり  
菊、栗、きく、くり、三菊栗、合わせて菊、栗、六菊栗。

むぎ ごみ むぎ ごみ みむぎごみ あ むぎ ごみ むむぎごみ  
麦、塵、麦、塵、三麦塵、合わせて麦、塵、六麦塵。

なげし ながなぎなた た ながなぎなた  
あの長押の長 薙 刀は、誰が長 薙 刀ぞ。

む ごまがら え ごまがら まごまがら まごまがら  
向こうの胡麻殻は荏の胡麻殻か、真胡麻殻か、あれこそほんのまの真胡麻殻。

かざぐるま  
がらびいがらびい 風 車。

お こほうし お こほうし ゆんべ こぼ またこぼ  
起きやがれ小法師、起きやがれ小法師、昨夜も溢して又 溢した。

たあふぼぼ、たあふぼぼ、ちりから、ちりから、つつたつぼ、

ひいだこ お に く  
たつぼたつぼ 干 蛸、落ちたら煮めて食おう。

に や く もの  
煮ても焼いても喰われぬ物、

ごとくてつきゅう ぐまどうじ  
五 徳 鉄 弓 かな熊 童子に、

いしくまいしも とらくまとら  
石 熊 石 持ち、虎 熊 虎 ぎす、

なか とうじ らしょうもん いばらぎどうじ ぐりごごう む  
中にも東寺の羅生門には、茨木 童子がうで栗五合つかんでお蒸しやる。

らいこう ひざもとさ  
かの頼光の膝元去らず。

## 第五段

ふな きんかん しいたけ さだ ごだん そばき そうめん うどん ぐどん こしんぼち  
鮒・金柑・椎茸・定めて後段な、蕎麦切り素麵、饅頭か愚鈍な子新発知。

こだな こした こおけ こみそ こあ こしゃくしこも こすく こよ  
小棚の小下の小桶に、小味噌が小有るぞ、小杓子小持って小掬って小寄せ。

がってん こころえたんぼ かわさき・かながわ・ほどがや・とつか はし い  
おっと合点だ、心得田圃の川崎・神奈川・程ヶ谷・戸塚は走って行めけば、

やいと す む さんり ふじさわ ひらつか おおいそ  
灸を擦り剥く三里ばかりか、藤沢、平塚、大磯がしや、

こいそ しゆく なな お そうてんそうそう そうしゅうおだわら とうちんこう かく ござ  
小磯の宿を七つ起きして、早天早々、相州小田原、透頂香、隠れ御座らぬ。

きせんぐんじゅ はな おえど はな  
貴賤群衆の、花の御江戸の花ういろ。

あれ はな み おこころ おやわ やい うぶこ はうこ い  
アレあの花を見て、御心を御和らぎやと言う、産子・這子に至るまで、

こ ういろう ごひょうばん ごぞん な もう  
此の外郎の御評判、御存じ無いとは申されまいまいつぶり、

つのだ ぼうだ まゆ うす きね すりばち ぐわらぐわらぐわら  
角出せ棒出みせぼうぼう眉に、臼、杵、播鉢みばちばち桑原桑原桑原と、

はめ はず こんにちおい いずれもさま あ う  
羽目を外して今日御出での何茂様に、上げねばならぬ、売らねばならぬと、

いき ひ ぱ どうほうせかい くすり もとじめ やくしによらい しょうらん  
息せい引っ張り、東方世界の薬の元締、薬師如来も照覧あれと、

ほほうやま ういろう  
ホホ敬って外郎はいらっしゃりませぬか。